

呉音楽家協会ピアノ会員の大坪加奈です。会員として少しでも皆様のお役に立つような活動が出来れば、と思っています。どうぞよろしく願い申し上げます。このたび、エッセイを書く機会をいただきましたので、近況報告のような心に浮かんだことを書いてみたいと思います。

四月、広島市で行われたG7外相会合の前に「広島平和音楽サミット」が開催され、世界の著名な音楽家が集まり、演奏や公演が行われました。そのためにウィーンから広島に来られたO女史ご夫妻との再会は、非常に嬉しいものでした。お二人の音楽に対する姿勢、そして社会の一員として音楽で貢献したいというあついお気持ちを持った生き方に接するたび、背筋がピンと伸びるような気持ちになります。お別れする時、「こんなに夜遅く一人で電車に乗って帰るのは危険だ」と心配して下さるので、「ここは日本ですよ」と答え、「あ〜そうだったね」と皆で笑いました。ウィーンは今、夜に女性一人で電車に乗るのは危険だということを聞いて驚き、今ヨーロッパで起きていることを考えるとしばらく行けないな、と思ったのでした。

それから間もなく、春の風が舞い込むように、ドイツから一枚のはがきが届きました。ある洋服店で働いていたご婦人からでした。そこに通ううちに仲良くなり、帰国後も交流が続いていました。「夏にこちらに来る時には、ぜひ我が家に泊ってちょうだい、連絡してね。」という暖かいメッセージに心があつくなりました。今年はさすがに行けない、と思っていたところに届いた便りは、私を半分行く気にさせてしまいました。

その後、しばらくすると今度はドイツの恩師から手紙が届きました。毎年のようにレッスンを受けに行っていたので、今年の時期を提案して下さる内容でした。これでもう私の気持ちは決まってしまうました。私が暮らしたその街は緑豊かで、文化的で芸術を愛する人たちが多く住む所でした。そこで暮らした年月は自分の人生においてかけがえのない時間であったと思います。そのことを応援してくれた両親、そして留学の準備を進め助けて下さったI先生のおかげで実現したことを本当に有り難く思います。昨年、いつものように練習室を借りるためにドイツの楽器店に連絡したところ、その店の女主人F夫人の聞きなれた声で、「大変申し訳ないのですが、もううちの音楽教室はH氏に買ってもらったのよ。電話番号を教えてあげるから、聞いてみなさい。」と言われ、すぐにH氏に電話をかけましたが、前ほどピアノの数もないので空いていない、と言われ、もう一軒の楽器店に電話を入れると、そこも別の大会社に売ったばかり、とのこと。どうしたことだろう、あの豊かな街に何か異変が起きている、と感じざるを得ませんでした。途方にくれて再びF夫人に何か他に可能性はないでしょうか、と聞くと、別の音楽学校に聞いてみたら、と連絡先を教えてくれたので、日本からレッスンを受けに行くこと、練習できないと困ることを必死に訴えたメールを送りました。そして、念のために電話をかけると秘書の方が「外部の人に練習用に貸し出したことはない。一応上司に伝えるが、彼が判断するでしょう。来週電話するように。」と言われました。これはどうも駄目そうだ、と思いながら電話をすると、「それで、いつ来

るんですか？」と電話の向こうから日本語が聞こえたので、びっくり仰天してしばらく言葉が出ませんでした。その方はお母様が日本の方で流暢な日本語を話されるのでした。わけを話すと、レッスンは始まるまでの時間なら使っていいですよ、とのこと。絶体絶命のピンチに救われたような気持ちでした。ドイツの恩師のお宅に到着した時、「楽器店のF夫人から、
“日本から来るあなたの生徒に練習場所を提供できなくて申し訳ない”と電話がありましたよ。それは解決しましたか？」と言われ、F夫人の配慮に本当に心を打たれました。その日レッスンは終わってすぐにF夫人の店へお礼に行きました。

その昔、私の日本の恩師I先生が留学されていた時のことを話して下さったことを思い出しました。「家に閉じこもってピアノを弾いてばかりいてはだめだよ。日本で見たり聞いたり感じたりできないことを体験してきなさい。それがあなたの血となり肉となりやがて音楽ににじみ出てくるものなのだ。」という言葉をかけて背中を押して下さったのでした。時が流れ、街の様子が変わっても人々の心は変わらないままであることを知り、胸が熱くなる思いでした。またあの街の人たちの人情に触れたい、と心を決めました。